遺跡からのメッセージ（52）

弥生時代を再考する ⑥「対海国」を巡る旅

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

11月2日～3日、「対海国を巡る旅」と題し、各地から集まった有志8名と連れだって、玄界灘に浮かぶ対馬を訪問した。前日の1日夜、博多港を夜10時30分出発のフェリーに乗り込んで、6時間ほど波に揺られ、翌朝4時半に対馬市北部、上対馬町の比田勝港に到着する。まだ周囲は真っ暗だが、釣竿を抱えたグループなどはみな下船して散り散りになってゆく。我々の一行は、船内で夜が明けるのを待ち、港に手配してあったレンタカーに乗り込み、島内の遺跡巡りを開始する。今回の現地視察には、現地での手配や資料の作成を行った常松幹雄さん（福岡市埋蔵文化財課）のほか、弥生時代の青銅器を研究する吉田広さん（愛媛大学）、地元出身の考古学者、俵寛司さん（九州大学大学院・東洋大学）が同行しているので、対馬の遺跡を見学し、青銅器などの出土資料の検討を行うには万全の態勢だ。

港の脇にある「網代の漣痕（れんこん）」は、黒灰色の泥岩と砂岩の互層が波に洗われて、独特の海岸地形を形成している場所で、ここでは対馬の基本的な地質と地形を知ることができる。ここに限らず対馬の地形で印象的なのは、「土地は山険しく深林多し。道路は禽鹿（きんろく）の径（みち）の如し」、「良田無く、海物を食し自活す」という『魏志倭人伝』による「対海国」（対馬国）の描写どおりに、全島にわたって、緑深い山々と紺碧の海が平野を挟むことなく直結することだ。昔も今も変わりなく、限られた幾つかの平野に寄り添って人々が住み着いているようで、『魏志倭人伝』では「千余戸有り」と記されている。

写真1　塔の首遺跡の解説板

次の訪問地、塔の首遺跡は、港のある入り江を見下ろす尾根の突端に営まれた弥生時代後期（紀元1～2世紀）の墳墓群で、板石を組み合わせた「箱式石棺」から、青銅製の広形銅矛が副葬品として出土したことで知られている。広形銅矛とは、弥生時代の中で独自に発達した青銅器の一種で、銅矛が武器としての実用性を失って極度に大型化したものだ。対馬では、福岡平野で生産されたこのような広形銅矛が、銅鐸の場合と同じように丘陵上に複数個が埋納されたり、あるいは墳墓の副葬品の形で出土したり、大量に見つかっている。塔の首遺跡では、広型銅矛が韓国の無文土器と北九州の弥生土器とともに出土したのが特徴的で、これもまた、「船に乗り、南北に市糴（してき）す」という『魏志倭人伝』の記述を彷彿とさせる。

レンタカーは、もう一カ所、経ノ隈墳墓を訪れたあと、上県町に入って海岸線沿いを進み、「異国の見える丘展望所」で駐車する。ここから朝鮮半島までは、直線距離で約50km。『魏志倭人伝』には、朝鮮半島南部の「狗邪韓国」を経て、「始めて一海を度る。千余里。対海国に至る」とある。眼前には、その「一海」の光景が広がり、天気がよければ、朝鮮半島南岸の山々を遠望することができる。絶景を前にして、写真を撮影するためにスマホを取り出して驚いたのは、日本国内の電波より、韓国からの電波の方がここでは強く、韓国に滞在していると誤認したキャリアから「海外パケット放題」の案内が届いたことだ。韓国との距離の近さを再認識しながら、慌ててスマホを機内モードに切り替えたことは言うまでもない。

上県町ではさらに、白嶽古墳群、志多留貝塚、大将軍山古墳を見学しながら、峰町へと南下し、三根遺跡、井手遺跡、峰町歴史民俗資料館、タカマツノダン遺跡、大田原丘遺跡を視察し、さらに南に進んだ豊玉町では、唐崎遺跡、シゲノダン遺跡を訪問する。いずれも弥生・古墳時代における対馬と朝鮮半島、北部九州との密接な交流を物語る遺跡ばかりだ。昼食後、美津島町の黒瀬では、区長さんのご厚意で、地元の神社に伝わる広型銅矛7点の実物資料をつぶさに観察させていただくことができ、大型化した青銅祭器の存在感にただ圧倒されるほかなかった。弥生時代の対馬の人々は、交易で得た富をこのような青銅祭器を入手することに投入していたのだろうか。黒瀬地区の入り江を挟んだ対岸の山上にあるのが、古代の山城として知られる「金田城」で、船で渡ればすぐなのだが、今回は、レンタカーで入り江を回り、山麓の駐車場から歩いて山頂をめざした。1時間ほどの登山の後、山頂からの眺望を楽しみ、1日目の行程は終了となった。美津島町内の民宿に宿泊し、2日目は、万関橋、西漕手、和多都美神社、烏帽子岳展望所、豊玉町郷土館、出居塚古墳、根曽古墳群などのスポットを巡る。最後は厳原町で矢立山古墳群を見学し、厳原港を午後3時半出発のフェリーに乗船。慌ただしいながらも濃密で充実した対馬訪問となった。

写真2　金田城からの眺望

さて、筆者が前に対馬を訪問したのは、1994年夏だったから、今からちょうど25年前のことになる。その頃の島内は、厳原町・美津島町・豊玉町・峰町・上県町・上対馬町の6町に分かれていたのが、2004年、6町が合併して対馬市となり、市役所を厳原に置いた。その際の人口は約41,000人だったのが、現在は、約3万人まで減少しているという。しかし近年は、観光振興に力を入れ、2000年代から韓国人観光客が右肩上がりに増加し、昨年は、対馬を訪れた観光客約53万人のうち、約41万人が韓国人だったという。今回の訪問でも、韓国人観光客が訪れそうな場所には日本語に加えてハングルの表記が当たり前になされていたが、韓国人の団体を目撃したのは1回だけだった。「過去最悪の日韓関係」のあおりで、9月以降、韓国人観光客が対前年比9割減となっているのだという。国際的な政治情勢が人々の交流や交通ルートに影響を及ぼすのは古今東西にしばしば見られる現象、と言ってしまえばそれまでだが、何とかならないものだろうか。